

---

# Larme

雨月 紗誘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Larme

### 【Zコード】

Z3068C

### 【作者名】

雨月 紗誘

### 【あらすじ】

夢を追いかけた青年が夢を手にした時、失くしたものはあまりに大きかつた

(前書き)

ベタな設定です（――：）

本当は、ずっと一緒に居られたらと思う。

：冷たい風が、肌を刺す。

黒い「コートに、綺麗な結晶の形をした雪は、よく目立つ。

冷えきつた指先で触れようとした瞬間、スッと溶けて消えてしまう。

：「…」じめん、遅くなつて。」

もう、何も言わない『彼女』にかかつた雪を払う。

半分以上雪に埋もれていた『彼女』は、僕の指先より冷たかった。

：今日は、クリスマス・イブ。

僕の小指には、あの日、あなたにあげた指輪が光っていた。

僕の生まれた街は、深く白い雪が美しい街だった。  
僕は、ド田舎だけど、この街が好きだった。

大切な人達がいる街。

双子の姉、母、仲間に友達、

：そして

「宏暁？」

「…あづさ

彼女。

高3の生温い風が吹く夜、僕は彼女を呼び出した。

：大好きな彼女に、別れを告げる為に。

何も知らない彼女は、いつもと変わらない無邪気な笑顔で、僕の元に駆け寄つて來た。

あと、数分後には、彼女は、きっと泣いている。

：僕のせいだ。

でも、僕は知っていた。

彼女が国立大学を狙っていることも、それに見合ひう学力を持つていることも。

：僕が切り出すと、やつぱり、彼女の頬を涙が伝った。

本当は、別れたくなんかなかつた。

：僕らは、進む道が違ひ過ぎたんだ。

“これが、2人にとつて一番幸せなんだ”と、自分に言い聞かせた。

そうじやなきや、やつてられなかつた。

でも、僕がそれを口にした途端、彼女は僕の頬を叩いた  
あの時、彼女が叫んだ言葉が、今も僕の胸に刺さっている。

次の瞬間、僕は彼女をきつく抱きしめていた。

「約束しよう」

：別れるつもりだつたのに。

「だから、、、」

風が強くて、なかなかろうそくに火がつかない。

かじかんだ指では、ライターの火をつける事もろくに出来ない。  
やつとついた火を、僕は手で覆つた。

今にも消えそうな火は、それでも、ほのかに暖かかつた。

：堪えていた涙が、溢れ出した。

クラスに進路が決まつた人が出てきた頃、僕らの街に、冬がやつて  
來た。

僕は東京の就職先が内定し、あずさは、有名大学の教育学部に特待  
生として、合格した。

互いに進路が決まつた僕らは、12月、初めてクリスマスを2人で

過ごした。

： 2人で、北海道に旅行に行つた。

最初で最後の旅行だつた。

スキー場で滑つた後、ホテルで遅くまでいろんな事を話した。酔つているのか、あずさは泣いてばかりだつた。

僕らは、どちらからともなく口唇を重ねた。このまま、時間が止まればいいと思つた。

： 上京する事を、初めて迷つた。

白い息を手に吹きかけ、僕は、姿のない彼女を見つめる。また、止むことのない雪が積もつてきた。

： 僕の思いのよう。

雪の中で卒業式を終え、ついに、僕らが上京がする日がやつて來た。見送りには、沢山の友達が來てくれた。

： もうすぐ、電車が出る。

僕は電車に乗り込み、あずさに言つた。

「必ず…」

ベルが鳴り、ドアが閉まる。

あずさは、涙を浮かべながらじつと僕を見ていた。

必ず、迎えに行くから。

粉雪の中、電車はゆっくりと動き出した。

姉から餞別にもらつたウォークマンを握り締め、ドアに寄りかかりながら、僕は堪え切れず、涙を流した。

僕は、ノートのポケットから、一枚のCDを取り出した。明日発売の、INNOCENCEのベストアルバムだ。  
このアルバムを、一番に彼女に聴いてもらいたかった。  
…でも、僕の声は、もう、彼女には届かない。

何万人もの人を前に、ステージでライトを浴びる。  
夢にまで見た光景が、目の前に、現実としてある。

デビューしてもうすぐ3年。

INNOCENCEの名もそこそこ知れて來たし、ある程度安定した収入も得られるようになつたけど、彼女を迎へに行くには、何か足りない気がしていた。

INNOCENCEには、ヒット曲がなかつた。  
ヒット曲がないから、迎えに行けない。

ただの意地かも知れないけど、今の僕では、“あの日の約束”には不十分だと思つていた。

「あずさの事、書けばいいじゃん」

いつものように五線ノートを広げ、ギターを弾いていた僕に、哲明が言つた。

「何言つてんだよ」

半分笑いながら僕が言つと、

「喜ぶよ あずさ」

と、僕の言う事なんて、全く聞いていない。

最初は相手にしてなかつた僕も、結局は、あずさに曲を書いていた。  
ほとんど寝ないでペンを紙にぶつけた。

…離れていた8年分の思いを込めて。

やつと出来上がつたその曲、『For Dear』は、シングルで売り出される事になつた。

自分の持っているもの全てを注ぎ込んだ。

発売日から2日が過ぎた日、オリコンの1位の欄には、『For Dear』とあった。

2位との差は、凄かつた。

INNOCENCEの名が、日本中に知れ渡った瞬間だった。  
連日の耳を疑うようなニュースに、僕らは、まるで夢の中のような  
感覚で、テレビを眺めていた。

僕らには実感がなかつた。

でも、ひとつだけ、確かな事がある。

これで、胸を張つてあざさに逢いに行ける。  
気が付くと僕は、緑の窓口に駆け込んでいた。

アルバムの封を切り、中から歌詞カードを取り出す。収録曲を指  
でなぞり、7番目：

『For Dear』

2つの意味で、僕の運命を変えた曲。

僕が、どんな思いでこの曲を歌つたのか、…あなたには伝わらなか  
つたのかな？

「…え？ 嘘でしょ？ …ねえ、 麻梨さん…」

麻梨さんは、黙つたまま、僕と目を合はせようとしない。

「麻梨さん…」

「だめだ。

…そうだ。

夏名！

僕は、見慣れた街を走った。

夏名が、…双子の姉が居るはずの我が家に向かつて。

数時間前。

僕は、8年ぶりに青森に帰つて來た。

上京する時に、彼女と交した約束を守る為に。  
彼女の家を尋ねたが、留守だったので、仕方なく哲明の姉、麻梨さんのお喫茶店に行つた。

…そこで僕が聞かされたのは、受け入れ難い運命だった。  
信じられない、信じない、信じたくない。

「夏名っ！」

乱暴にドアを開け、僕は叫ぶ。

「夏名、嘘だよね？…ねえ、夏名！ 夏名あ！」

夏名は、何も言わず、下を向いていた。

僕は夏名にしがみつき、泣いた。

「何か言つてよ…」夏名！

夏名の目からも、涙が流れていた。

…これが、現実なんだ。

僕は、病院に向かい走った。

個室のドアを開けると、そこには、まるで別人のような彼女がいた。

…僕とあなたは、あと、どれくらい一緒に居れるのかな？

吹雪がおさまると、僕は、煙草をくわえ、火をつけた。

あの時、一緒に東京に行こうと言つたけれど、最後まで彼女は首を縦に振らなかつた。

今でも、それがなぜなのか、僕にはわからない。

…また涙がにじんできた。

気付くと僕は、『For Dear』を口ずさんでいた。

「また、すぐ来るから」

僕は、果たせもしない約束をし、故郷を後にした。

東京に戻った僕は、毎日仕事に追われた。

テレビに出て、ラジオに出て、雑誌のインタビューに答え、レコードイングをし、ライブの合間に曲を書いた。

…でも、時間なんて本気で作ろうと思えば、いつでも、いくらでも作れたはずなんだ。

結局、僕は彼女より仕事を選んだ。

彼女の元には戻らなかつた。

『戻れなかつた』んじゃない。

『戻らなかつた』んだ。

そんなある日だつた。

音楽番組の収録が終わり、携帯を見ると、夏名から電話が来ていた。まさかと思い、慌ててかけなおすと、やつぱり内容は、『あずさが危ないからすぐに帰つて来い』だつた。

僕は、すぐにでも逢いに行きたかったけど、もう1人の僕が囁く。

“INNOCENCEのリーダー、として仕事を投げれない。

テレビやラジオに穴は開けれない。

ライヴツアーも入つている。

何より、ファンが待つている。

僕は、夏名に怒鳴られても、帰るとは言わなかつた。

心配じやない訳じやない。

心配じやない筈がない。

でも、僕は、帰らなかつた。

仕事中も、あずさの事が気になつて仕方なかつた。

でも、僕は、帰らなかつた。

病に苦しむ彼女の元へ帰らなかつた。

あの時夏名は、電話の向こうで泣いていた。

雪の中、こちらに向かう人影をみた。

僕は走り、木の陰に隠れる。

ガサガサと、なにかの音がする。

一体、誰だろ？

確かめようにも、顔は出せない。

僕のファンは日本中にはいるけれど、この街には、もういない。

「…宏暁？」

彼女が呟く。

それは、聞き憶えのある声。陰から覗いて見ると、彼女もまたINNOVENCEのベストを持っていた。

「…夏名？」

事務所のソファードで仮眠を取る僕を起こしたのは、マネージャーの怒鳴り声だった。

ドアを開くとそこには、うつ向く哲明、真っ赤な顔をしたマネージャー、哲明をかばう純一に、ソファードに座る尚人が居た。

「…いつたい、何が」

僕が目をまるくしていると、純一が答えた。

「…哲明の、声が出なくなつたんだ」

「は？」

僕は、しばらく話がのめかつた。

哲明が喉を痛めた原因は、カラオケで飲みながら歌い続けたせいら

しい。

でも、なぜ？

いくら哲明でも、そこまでバカではないはずだ。

そんな事をしたらどうなるかなんて、簡単に予想がつく。  
まさか、

「全く、カラオケになんか行かなくとも、毎日いやと言つ程歌つて  
いるだろ」

マネージャーの嫌味に、哲明は、下を向いて黙つていた。  
「一週間休みだ」

不満そうにマネージャーが言つ。

尚人は立ち上がり、僕の肩を叩いた。

「行くぞ」

尚人は、バイクを出し、僕は後ろに乗つた。

東京駅に向かう高速道路で、尚人は僕に言つた。

「バカだよなあ 哲明も 他にいくらでも方法はあるのに」

「ああ」

僕の目には、うつすら涙がにじんでいた。

駅に着くと、勇平が切符を持つて待つっていた。

「行つて来い」

尚人と勇平が僕を見送る。

僕は、涙を必死に堪えていた。

いつだつてそう。

僕は、INNOCENCEに、みんなに守られていた。

新幹線の窓に額をくつつけ、僕は静かに泣いていた。

「やつぱりこれ、宏暁だつたんだ」

夏名は僕が持つて来たアルバムを指してそう言った。

僕は、黙つて首を縦に振る。

「…大変だつたんだからね あの後」

夏名は、笑顔を作りながら、涙を浮かべていた。

「…INNOCENCE 誰も来ないんだもん」

「…」めん 「私に謝つたつて、仕方ないじゃないつ！ …もう、」

夏名の目からは涙が溢れ、肩は震えていた。

「もう、どうにもならないんだから…」

僕が青森に着いたのは、その日の夕方だつた。  
それでもよかつた。

日付さえ変わらなければ。

11月14日

きっと、哲明は、この日を狙つていたんだ。…今日は、あずさの誕生日だから。

東京を出る時に、とても急いでいたけれど、それでも、財布の他に

もう一つ、大事に握りしめて来た物がある。

病院に着いた僕は、それをあずさの掌に乗せ、きつく手を握つた。

「…結婚しよう」

僕は手を離し、あずさは、ゆっくりと握つた手を広げる。

あずさは、それを見つめ、涙を流した。

僕は、あずさの手を取り、それを薬指にはめる。

今にも滑り落ちそうなそれを、あずさは大事そつに握りしめた。

指輪のついた左手で僕の手を握りながら、あずさは、ゆっくりと目を閉じ、そのまま目を覚ます事はなかった。

面会時間も夕食の時間も過ぎて静まる病院に、ナースコールが虚しく響き渡るのを感じた。

僕らの約束は、果たされぬまま…

僕は、溢れる涙を止める事が出来なかつた。

ちょうど、『あの日』のあなたのように。

窓の外には、この冬最初の粉雪が舞い始めた。

あずさは、雪が好きだつた。

深く白い雪が。

この街の、美しい雪が…

僕は、何かに取り憑かれたように、麻梨さんの喫茶店に向かつて走つていた。

あずさと夏名に背を向けた僕は、誰にも気付かれないように、街の外れに向かつた。  
街が一望出来る、あの場所へ。

僕はあずさの葬式にも出ず、東京へ戻つた。

あずさが死んだ日、麻梨さんの喫茶店で書き上げた楽譜をメンバーに渡し、新幹線で考えてた歌詞を哲明に渡して言つた。

「哲明の喉が治り次第、レコーディングだ」僕はそう言つと、尚人と曲のアレンジをはじめた。

みんな、ただひたすら、それぞれの楽器を鳴らした。

誰も、何も言わなかつた。

誰も、何も聞かなかつた。

夏名も麻梨さんもわかつてくれなかつた僕の気持ちを、みんなは分かつてくれていた。

その曲、『Larme』は、クリスマスに出すベストアルバムのボーナストラックとして、初回プレスのみに付けた。

：これが最後だった。

INNOCENCEのTHROAKIは、もうすぐ居なくなる。

もう、曲は書けない。

もう、ギターは弾けない。

もう、どうにもならない。

雪が止んだ丘の上で、僕は街を見渡した。

僕が生まれ、育った街。

僕と彼女が出逢った街。

INNOCENCEが生まれた街。

：そして、彼女が眠る街。

さまざま思い出が溢れるこの街は、今の僕には辛すぎる。  
2人で過ごした日々も、今となっては、思い出でしかない。：失くして初めてその大切さに気付いた僕を、あずさは許してくれているのだろうか？

あずさは、どんな思いで過ごしていたのだろうか？

：僕の耳の中で、“あの日の約束”がこだまする。

『絶対、有名になる 有名になつて、帰つてくる 日本中に僕達の事を知らない人がいないくらい有名になつて、迎えに行く …… だから、その時は一緒に暮らそう』

：約束したのに。

エリナも続く空の下、僕は何も見えなくなっていた。

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございます（こーと）  
次回以降の参考になるので、ご意見やご感想をいただけると有り難  
いです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3068c/>

---

Larme

2010年10月12日07時13分発行